

上原和博士台湾関係著作抄（四訂稿）

（令和 4（2022）年 7 月 15 日（金）現在）

（作成、改訂経緯）

HP 初出：平成 29（2017）年 6 月 5 日（月）初稿作成

平成 29（2017）年 6 月 23 日（金）改訂稿作成

（誤植等一部修正、一部追加）

平成 30（2018）年 12 月 2 日（日）二訂稿作成

（誤植等一部修正、一部追加）

令和 4 年（2022）年 4 月 1 日（金）三訂稿作成

（レイアウト変更の上、全体にわたって整理す

るとともに、「【参考 3】長谷場義久氏追悼文」

を追加し、『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏

先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・

著作目録【参考篇】【附篇】一ローマ法・法制

史学者著作目録選（第十五輯）一』（令和 4

（2022）年 4 月 1 日刊）に収録した。）

令和 4 年（2022）年 7 月 15 日（金）四訂稿作成

（一部修正、追加）

〔目 次〕

（作成、改訂経緯）	1
1 はじめに	2
2 台湾関係著作抄	2
3 上原博士自身関係	4
【参考 1】「逍遙歌（高砂周遊の歌）」関係	5
【参考 2】終戦前後の台湾関係	6
【参考 3】長谷場義久氏の御逝去を悼みて	6

1 はじめに

成城大学名誉教授上原和博士(古代美術史家、1924.12.30～2017.2.9)には平成 29(2017)年 2 月 9 日逝去された。享年 92。

〈<http://www.asahi.com/articles/ASK2B77P3K2BUTFL00R.html>〉

〈<http://mainichi.jp/articles/20170211/k00/00m/060/030000c>〉

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E5%8E%9F%E5%92%8C>〉

追悼記として、現在のところでは、例えば黒羽夏彦氏「上原和氏を悼む」『台湾協会報』第 750 号(平成 29 年 3 月 15 日刊)第 3 面がある。

同博士の著作目録、略歴については、『上原和博士古稀記念美術史論集』(同刊行会、平成 7 年 3 月 24 日刊)(「上原和博士著作等目録」：487～513 頁、「上原和博士略歴」：514～517 頁、上原博士の肖像あり。)に詳しいが、台湾関係分に関してはなお補足の要がある。ついで、以下にその一端を記載しておくこととする。本稿作成に当たっては長谷場義久氏(台大予科一回文科修了)及び黒羽夏彦氏より貴重な御示教を賜った。記して深甚の謝意を表するものである。

2 台湾関係著作抄

*大正 13(1924)年 12 月 30 日 台中市に生まれる。

*昭和 7(1932)年 2 年生時 台北市から台南市に移り、同市の小学校に転校す

*昭和 12(1937)年 3 月 台南市立南門尋常高等小学校卒業(第 19 回)

*昭和 12(1937)年 4 月 台南州立台南第一中学校入学(第 24 回)、前嶋信次氏(1903～1983)等の指導を受ける。

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%89%8D%E5%B6%8B%E4%BF%A1%E6%AC%A1>〉

*昭和 14(1939)年 3 年生時 2 学期 台北州立台北第三中学校に転校

*昭和 17(1942)年 3 月 同卒業

*昭和 17(1942)年 4 月 台北帝国大学予科(二回文科)入学、松村一雄氏等の指導を受ける。

〈<http://www.rekishu-archive.city.naha.okinawa.jp/archives/item3/80483>〉

昭和 17(1942)年

・「皇道」『三中』(台北州立台北第三中学校報国校友会誌)第 4 号(昭和 17 年 7 月 10 日刊。復刻版：台北三中校友会誌「三中」頒布会、昭和 56 年 2 月 1 日刊)41～42 頁(台北三中卒業後の刊行であるが五年生時の作品を掲載。)

昭和 17(1942)年～

・「[台大予科] 二回文科の同人誌「青雲」にロマンにあふれ異国情緒の満ちた詩を[発表した。]」中根嘉雄氏(上原氏と台大予科同期生)「青春と寮歌—東洋の小パリ・台北の日々—」『台湾協会報』第 574 号(平成 14 年 7 月 15 日刊)第 2 面に拠る。同人誌『青雲』は未見。

昭和 18 (1943) 年

・「首里にうたへる」(詩)『士林』第 2 号(台北帝国大学予科報国学友会予科部会、昭和 18 年 9 月 26 日刊) 74～75 頁

・「霊御殿」(歌)『士林』第 2 号(同、同) 84 頁

・「編輯餘録」『士林』第 2 号(同、同) 220～224 頁中の 221～222 頁に上原氏博士稿あり。

*昭和 19 (1944) 年 9 月 台北帝国大学予科(二回文科)修了

*昭和 19 (1944) 年 9 月 海軍予備学生、茨城県土浦海軍航空隊入隊

*昭和 19 (1944) 年 10 月 台北帝国大学文政学部入学

*昭和 20 (1945) 年 8 月 鹿児島県(桜島)で終戦、復員

*昭和 21 (1946) 年 1 月 九州帝国大学法文学部に転入学

* (昭和 22 年 9 月 30 日九州大学に名称変更)

*昭和 23 (1948) 年 3 月 同卒業

昭和 51 (1976) 年

・「父の思い出」(初出: 後掲『上原和博士古稀記念美術史論集』所載「上原和博士著作等目録」には『文藝春秋』昭和 51 年 10 月号とあるも『文藝春秋』当該号には何故か出ておらず。また、下記『トロイア幻想 わが古代散歩』では『春秋』昭和 51 年 10 月号とするも『春秋』当該号には不掲載との由。⇒初出は何か? 要確認。)

昭和 54 (1979) 年

・『斑鳩の塔に雲流れて一わが回想の聖徳太子一』(主婦の友社、昭和 54 年 3 月刊。後に改題の上『わが回想の聖徳太子』(中公文庫、平成 6 年 5 月 10 日刊)として再刊。)

・「ゼーランジャ城回想」『探訪大航海時代の日本 8 回想と発見』(小学館、昭和 54 年 3 月 20 日刊) 95～108 頁(『台湾協会報』第 750 号(平成 29 年 3 月号)以下に再録。)

昭和 56 (1981) 年

・『トロイア幻想 わが古代散歩』(PHP 研究所、昭和 56 年 5 月 11 日刊)(上記「父の思い出」(243～247 頁)及び「回想のゼーランジャ城」(上記「ゼーランジャ城回想」の抄録、248～257 頁)を収録。)

平成元 (1989) 年

・『トロイア幻想 古代憧憬の旅』(講談社学術文庫、平成元年 6 月 10 日刊)(56、57、232、245 頁に台湾関係記述あり。)

平成 6 (1994) 年

・「逍遙歌 餞けの詩稿—高砂周遊の歌のこと—」『芝蘭—台北帝国大学予科創立五十周年記念誌一』(台北帝国大学予科創立五十周年記念誌編集委員会、平成 6 年 6 月 20 日刊) 126～130 頁(127 頁に長谷場義久氏(台大予科一回文科)「現代の高校生に歌いつがれた逍遙歌」あり。)

・「敦煌で迎えた敗戦記念日」『台北三中同窓会会報』第 17 号(台北三中同窓会、平成 6 年 9 月 20 日刊) 21 頁

平成 7 (1995) 年

・「出会いの風景 最終講義」『朝日新聞』平成 7 年 2 月 13 日(月)夕刊 2 版 5 面(2 月 13～17 日同氏連載分の第 1 回)

平成 8 (1996) 年

・「わが“まぼろしの母校”はアジア有数の総合大学に」『読売新聞』平成 8 年 5 月 2 日夕刊（⇒『はるかなる青春』（扉には「日台合同蘭香会の栞 平成 9 年 4 月 7 日（日）於箱根湯本富士屋ホテル」とある。日台合同蘭香会（台北帝国大学予科同窓会）、平成 9 年 4 月 9 日刊）37～38 頁に再録。）

平成 10 (1998) 年

・「太平洋戦争開戦の頃」『扶揺に羽搏つ 臺北州立臺北第三中学校の記録』（台北三中同窓会、平成 10 年 6 月 10 日刊）89～90 頁（「扶揺に羽搏つ」は台北三中校歌第一節冒頭）

・平成 10 (1998) 年 11 月 13 日台湾大学第 4 会議室で開催された国立台湾大学創立七十年記念シンポジウム「台北帝大の生活と母校への提言」（右書 175～198 頁）中での上原氏発言『台北帝大の生活』（国立台湾大学、1999（民国 88）年刊）186～188 頁

平成 11 (1999) 年

・「逍遙歌「高砂周遊の歌」について—さらに母校台湾大学において歌い継がれんことを—」『台北帝国大学予科 第 1 部 寮歌集 第 2 部 よもやま話』（台大予科同窓会 蘭香会、平成 11 年 9 月刊）54～57 頁

平成 13 (2001) 年

・「台湾語による「華麗島周遊の歌」がさらに永遠に歌い継がれんことを」『台北帝国大学予科創立六十週記念文集（芝蘭六十年 台北帝国大学予科創立六十周年記念 蘭香会）』（平成 13 年 1 月刊。2001 年 1 月 13 日前夜祭於北投熱海大飯店及び同年 1 月 14 日記念祭於台北国賓大飯店での配布冊子）

・「一篇の詩 『海原にありて歌へる』」『新潮』平成 13 年 4 月号（『蘭香会会報』（台北帝国大学予科同窓会蘭香会）1 号（平成 13 年 12 月 15 日刊）22～25 頁に再録。）

平成 14 (2002) 年

・「ミャンマーへの旅—『ビルマの豎琴』を携えて—」『新潮』平成 14 年 8 月号（台北帝国大学予科同窓会誌『蘭香会会報』2 号（台北帝大予科同窓会蘭香会、平成 14 年 12 月 15 日刊）21～30 頁に抄録（「私の台大予科時代に関連のある前半の第一、第二章を転載」との由）

平成 17 (2005) 年

・「終戦前後断章—詔勅後の特攻隊赴任 死ぬ覚悟は何だったのか—」『東京新聞』平成 17 年 8 月 31 日夕刊（『蘭香会会報』5 号（平成 17 年 12 月 25 日刊。）37～38 頁に再録。）

・「小学校時代の恩師からの手紙—九十五才、長寿の秘訣—」『蘭香会会報』5 号（平成 17 年 12 月 25 日刊）33～36 頁（『蘭香会会報』は 5 号で終刊）

＊平成 29 (2017) 年 2 月 9 日 逝去、享年 92

3 上原博士自身関係

・『上原和博士古稀記念美術史論集』（同刊行会、平成 7 年 3 月 24 日刊）（「上原和博士著作等目録」：487～513 頁、「上原和博士略歴」：514～517 頁、上原博士の肖像あり。）

・「新人国記 82 (359) 外地 23 植民地に心裂かれ 埴谷雄高 尾崎秀樹 上原和 前嶋信

次)『朝日新聞』昭和 57 年 9 月 20 日(月)夕刊 4 版 1 面

・「遠藤周作さんから戴いたもの」『新潮』第 93 巻第 12 号(追悼 遠藤周作一人間・文学・信仰、平成 8 年 12 月号、同 8 年 12 月 1 日刊)188～189 頁(遠藤周作: 1923.3.27～1996.9.29)

・「現代文明の危機 イラク七〇〇〇年の文化遺産は訴える」『蘭香会会報』3 号(台北帝国大学予科同窓会蘭香会、平成 15 年 12 月 15 日刊) 27～33 頁(『世界』平成 15 年 7 月号よりの転載。台湾関係の記載はなし。)

・「講演 敦煌石窟は人類の宝である―常書鴻先生の忘れえぬ言葉― 二〇〇四年九月十六日於敦煌研究院」その他『蘭香会会報』4 号(同、平成 16 年 12 月 15 日刊)(台湾関係の記載はなし。) 36～46 頁(『東京新聞』平成 16 年 9 月 7 日夕刊、『朝日新聞』同年 9 月 16 日夕刊各文化欄寄稿関係記事をも再録。)

【参考 1】「逍遙歌(高砂周遊の歌)」関係

・『日本寮歌集』(日本寮歌振興会、昭和 41 年 10 月 10 日初版刊、昭和 55 年 10 月 18 日改訂版刊、平成 3 年 10 月 5 日新装版刊)(台北帝国大学予科関係歌: 新装版 474～483 頁、「逍遙歌(高砂周遊の歌)」: 同 480～481 頁。同歌は同書で初めて公表との由。)

・「逍遙歌(高砂周遊の歌) 岩村光介・上原和・松村一雄合作、東 藤子作曲(昭和 18 年作)」『台北帝国大学予科 第 1 部 寮歌集 第 2 部 よもやま話』(台大予科同窓会 蘭香会、平成 11 年 9 月刊) 16 頁

・楽譜「(高砂周遊の歌) 台北帝国大学予科 岩村光介・上原和・松村一雄合作、東藤子作曲(昭和 18 年作)」同書 17 頁(東氏は台大予科教授東日出男氏(1914～?)夫人、「高砂周遊の歌」の最初の作曲者。)

・東藤子「高砂周遊の歌」同書 39 頁

・長谷場義久(台大予科一回文科修了)「蘭花草創の頃」同書 39～40 頁

・斎藤信彦(1925～)「台北帝国大学予科「逍遙歌」の周辺」同書 61～63 頁(斎藤氏は台大予科 2 回医類修了、「高砂周遊の歌」の三回目作曲者。「高砂周遊の歌」は三回作曲された。)

〈<https://www.kinokuniya.co.jp/f/dsg-01-9784651850160>〉

・岩村光介(1922～2000.11)『師と友と歌と―私の青春日記―』(私刊本、平成 12 年 8 月 30 日刊)(岩村氏は台大予科一回文科修了、「高砂周遊の歌」の「原逍遙歌」作詞者。同書には同歌をめぐる上原氏との興味深いやりとりが記載されている。)

・岩村光介氏には「岩村蓬」の筆名で「知られざる戦時台湾を描いた日記体戦争文学」の『草の絮』(くさのわた、木精書房、平成 8 年 2 月 20 刊)がある。

・本 HP 別稿「台北帝国大学予科「逍遙歌 高砂周遊の歌」関係資料一斑」(平成 29(2017)年 9 月 3 日(日)初稿作成。逐次改訂中。)(平成 30 年 12 月 2 日追加)

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/shoyoka001.pdf>〉

【参考 2】終戦前後の台湾関係

・つねあきお（竹内昭太郎、1927～2021.11.12）『臺灣島は永遠に在る 旧制高校生が見た一九四五年敗戦の台北』（ノンフィクション。堵南舎、平成 2 年 9 月 1 日刊）

（追悼文）齋藤毅「竹内昭太郎氏を悼む」『台湾協会報』令和 3（2021）年 12 月号第 2 面（同令和 4（2022）年 1 月号第 3 面に訂正記事あり。）（令和 4（2022）年 1 月 24 日追加）

・佳山良正（1924～2004）『台北帝大生 戦中の日々』（築地書館、平成 7 年 5 月 1 日刊）

・高橋英男（1929～）『台湾における「学徒兵」召集の実態とその法的背景』（高橋英男、平成 10 年 11 月刊）（平成 29 年 6 月園部逸夫先生（1929～）の御示教に拠る。）

〈<http://iss.ndl.go.jp/books/R1000000002-I000002747379-00>〉

【参考 3】長谷場義久氏の御逝去を悼みて（『台湾協会報』令和元年 10 月号参照）（令和 4 年 4 月 1 日追加）

長谷場義久氏には去る令和元（2019）年 9 月 10 日逝去された。享年 95。寔に痛惜の念に堪えない。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。同氏は上原和先生とは台大予科以来の御親友であられたことから、先年「上原和先生台湾関係著作目録」作成の折には親しく御指導を頂戴した。このため、僭越の誹りは免れ得ないが、氏の台湾とのつながりの一端に言及しておきたいと思う。これについては、（一財）台湾協会元理事長の齋藤毅顧問様、根井洸顧問様より御懇篤な御指導に与った。謹んで厚く御礼申し上げます。

長谷場氏は大正 13（1924）年 2 月台湾で出生され、台北一中、台大予科（一回文科）を経て昭和 18（1943）年 10 月台大文政学部政学科に進まれた。戦後九州大学法文学部に転学し、卒業後は大蔵省に入って要職を歴任、昭和 52（1977）年 6 月四国財務局長で退官され、爾後（財）証券保管振替機構専務理事等証券関係業界等で活躍された。

台湾協会との関係は早くから有されたようであるが、大蔵省の御先輩吉岡英一氏（1915～1999）が理事長であった平成 10（1998）年 6 月に理事に就任、翌 7 月には常務理事に選ばれ、同 13（2001）年 6 月まで務められた。同月新たに梁井新一氏（1925～2012、享年 88）が理事長に就かれたが、引き続き理事を同 19（2007）年 7 月まで務め、両期を通じて協会の運営、発展に多大の貢献をされた。その後も近年まで矍鑠として春の「交礼台湾の会」や秋の慰霊法要等に御参加、御参列され、協会をいつも温かく見守っておられた。今、氏の如き台湾を心から愛し、台湾関係諸事の御重鎮ともいえるお方を失いしは、寔に悲しいことである。

平成 29（2017）年 2 月 9 日台湾出身の高名な美術史家上原和先生（1924～2017、台大予科二回文科卒）が長逝されたが、黒羽夏彦氏が『台湾協会報』第 750 号（同年 3 月 15 日刊）に追悼文を書かれたのを承けて、上原先生の「台湾関係著作目録」をも作成することと相成った。その折、長谷場氏や上原先生の母校台大予科の同窓会会報『蘭香会会報』中の一冊（第 2 号、平成 14 年 12 月刊）を見ることができなかったことから、長谷場氏御所蔵本での確認方をお願いしたところ、同氏より「上原君は大親友であったから、その関係をも含め当時のことについて直に指導してあげよう。」との思わぬ御好意あるお言葉に接

し、深く感激した次第である。

そこで、早速同年 4 月 14 日、河原功先生とともに、長谷場氏より数時間にわたり親しく、台大予科や上原先生の思い出、当時の学校制度、軍事制度等につき貴重なお教を拝聴し、かつ、態々御持参された台大予科関係の多数の資料類をお借りできた。その後も成稿に当たって幾度かお電話で数々の御示教に与ったことも忘れ難きことである。この結果、上原先生の台湾関係著作目録についてはなんとか整理することができた（『台湾協会報』第 750 号（平成 29 年 3 月 15 日刊）～同第 753 号（同年 6 月 15 日刊）参照）。ここに改めて長谷場氏の御厚情に感謝いたすものである。ただ、遺憾なのは、上記資料類には長谷場氏関係のものもかなり含まれていたのに、当方の失態でこの時複写する機会を逸したことである。このため、今直ちにそれを再現することはできないし、再度拝見することも最早無理ではあるが、氏は昭和 16（1941）年春創設で僅か五年の歴史しか持ち得なかった台大予科に「台大予科創業歌 椰子の葉茂る学舎に」や「逍遙歌 高砂周遊の歌」の作詞者として有名な岩村光介氏（1922～2000）等とともに入られた第一回生（同年 6 月入学）であることから、母校については大変な思いをお持ちで、それには感動するばかりであった。その創立五十周年記念誌『芝蘭』（平成 6 年 6 月 20 日刊）の編集委員でもあられたとお聞きした。

いずれにせよ、長谷場氏の官界及びその後の御活躍や台湾協会での御活動については周知のとおりであるが、氏の在台二十年の歴史は、台湾における激動の昭和戦前史そのものであることから、今後機会をとらえて同氏の台湾関係著作類を探求してみたいと思う。なお、台大予科そのものについては、現在ではネットにかなりのものがアップされているので御参照いただければ幸いである。

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/shoyoka001.pdf>〉 参照。

（了）